

お酒の嗜み

お酒を飲み始めたのはいつ頃だったか、もはや確かな記憶はありません。1945 年生まれて後期高齢者の年齢を超えたのですから、余りにも昔のことを思い出す能力は消失しました。だからといって「仮面の告白」を書いた三島由紀夫のように、生まれた時のことを立派に記憶しているなどと言う嘘を並べ立てようとも思いません。ただし彼は作家ですから、その著作、特に小説類には敬意を払っていますし、個人全集も懐具合と相談しながら購入しました。黒表紙の立派な箱入りの装丁本です。或る年の夏休み、小説だけは読み尽くそうと時間をかけましたが、それなりの成果を手にしたなどとも思えません。彼の日本語の自由奔放ですばらしい表現には舌を巻くばかりで、とてもお酒のように味わうことはできなかったのです。西暦で 1900 年生まれの父親は全くお酒を飲むことができませんでした。わずかにお猪口一杯の酒で、心臓がドキドキすると言うのです。それも正月元旦恒例の、いわゆるお屠蘇を口にしたときの談で、真実味が在りました。ですから普段家族の食事の時にお酒が出てくる事はありません。しかしどういう訳か、わが家の押し入れには日本酒の一升瓶が何本も入ったままでした。おそらく何かお祝いなどの時に他人様から頂いたものだったのでしょう。それら一升瓶は誰かに飲まれるために口を開くこともなく、ただただ静かに沈黙していたと言っているでしょう。

酒が沈黙するという表現はおかしいでしょうが、私にはそう思えるのです。後々、自分でお酒を口にするようになって、酒は飲まれるためにこの世に存在するのであって、押し入れとか飾り棚に放置しておくのは、酒に対して申し訳ないからです。

話は変わりますが、田舎では夏祭りに獅子舞が一軒一軒それぞれの家を訪ね廻る行事が行われていました。幼い子供は獅子に頭を噛んでもらうと健康で健やかに育つと言われていました。ふたり一組の獅子が四・五組くらい、都合八人から十人程度で

威勢良く村中のそこここを活発に動き回るのはです。大人たちに要請されて、我々中学生も参加することになっていました。最初の内は、獅子の頭（かしら）を頻りに振り回す高度な技の必要な役柄ではなく、尻尾の方にくっつき頭を操作する主人公を支える役回りでしたが、結構難しい脇役だったと言っていいでしょう。しっかりと腰元を支えてあげなければならず、腕っ節が強くないと務まりません。そして獅子舞が終わると参加者全員で打ち上げの飲み会が催されていました。寛大な田舎の大人たちと一緒に、この時ばかりは未成年者の中学生もアルコールを手に取り口にすることができました。たいていビール程度だったと思いますが、それでも半分大人の真似事ができるのが嬉しくてなりません。その席で飲んだビールがおいしかったなんと言う気はありませんが、何となくアルコール類に対する抵抗感を和らげてくれたのだと思います。私はこの獅子舞行事に参加するのが当然だと思いながら、その後高校生になっても止めることはありませんでした。大学生になって故郷を離れて勉学に励むことになり、参加を取り止めにしたように思いますが、これもはっきりした記憶はありません。このような思い出も、当然ながら詳細な記憶が脳内に留められているわけでもなく、ぼんやりとしたその輪郭を引き出せるだけのようです。結局の所、何が言いたいのかというと、大学生になったとき最初の新入生歓迎コンパでかなりの量の日本酒を飲む機会がありました。いい気なもので、自分はかなり飲めるのだと思い込んでいたのです。学生同士、一対一の盃交換を自分から演出してしまい、ぶっ倒れたまま、鯨のように潮吹きならぬ酒吹きをやってしまいました。その後どうやって大学寮に帰ったのか記憶にありませんが、一週間ほど寝込んでしまい、最初の数日は天井がぐるぐる回るような吐き気がなかなか治まりませんでした。一種の急性アルコール中毒だったのだと思いますが、それで命を落とす羽目になったわけでもなく、アルコールにはある程度馴れていたと言っていいのかもしれない。

また大学寮では学生同士でよく飲み会をやる機会があり、あいつは酒癖が悪いという評判をもらうことになりました。それというのも普段は割合おとなしい人間が、酒を口にすると饒舌になり、抑制なく言いたい放題で口が悪くなるからのようでした。意識を失うほど飲むわけではないものの（実際そういう学生もいましたが、素面になった当人に飲酒中のことを尋ねても、覚えていないと言い張る者がいました）、かなり悪酔いするところまで飲むことが多かったのです。

幸いなことに、貧乏学生だったので飲み屋とか飲食店で酒を飲むような経済的余裕は殆どありませんでした。もしその機会があったらとんでもないことになったかもしれません。アルコールが入ると、普段のおとなしい自分から脱皮して好き勝手な言葉の世界に遊べるような気がしていたからです。事実最終学年の大学五年生の時、わずかばかりの小遣いを手にして飲み屋に行くことが偶にあるようになって、隣席の見知らぬおやじと口喧嘩になり、外に出ろと言われ、出たとたんビールびんで頭を殴られたことがありました。そのあとどうなったのか、これもはっきりした記憶はありません。しかし殴られたことだけは確かなのです。又ある時は、専門学科のコンパでたらふく飲んだのはいいものの、道路で倒れたように寝込み、誰かの助けでタクシーに乗せてもらい学生寮まで帰ったことがあります。とにかく自分で節度を持って飲むというのではなく、やけのヤンパチみたいな飲み方をよくしていました。多分、面白くない学生生活の憂さ晴らしに近いことをやっていたのでしょう。というか、飲み出すといかにも自分は酒に強いのだということを人に示したい欲求が出てくるようで、それほどの酒豪でもなく普通に飲める程度なのに、それを越えた強がりの気持ちが前に出すぎたのに違いありません。その頃は運動神経に自信があり、よく体を動かしていたせいか、体がそれなりのアルコール類を消化できていたのかなと思います。少しずつ味わいながら飲む酒ではなく、めったやたらに強がりで飲む酒は、あとからこっ

ひどい仕返しをされるのです。飲酒の最初の内は蒼白い顔をしており、そのうち突如としてアルコールの酔いが全身を駆け巡る始末でした。今現在から考えると、当時の日本酒は燗をつけて飲んでいたわけではなく、冷や酒をコップで飲むようなことばかりでした。それに加えて、変てこな化学アルコールが入った安酒だったのではないのでしょうか？いわゆる現在口にする純米酒のすっきりした味とは違っていたように思われます。

しかしながら酒の上での個人的な失敗を重ねる内に、段々とお酒の飲み方のコツが分かってくるようになるものです。簡潔に述べれば、自分の飲める酒の量がどの程度なのかが少しずつ自覚できるようになるでしょう。この認識の節目がその後のアルコール摂取にとって大きな転回点となり、自分に合った適正な酒量が決まってくることになります。

などともっともらしいことを述べましたが、本当はそんなに簡単なことではありません。上述した失敗にさらに幾度となく失敗を重ねたのですが、もはや失敗談をこれ以上記述する気持ちは失せてしまいました。実はお酒の飲み方ではなく、日本酒の中味や製造方法、販売、流通状況などについては何も知らないまま長い間お酒を飲み続けていました。基本的なことを何一つ知ろうとも思わなかったのですが、実に不思議なことに、ある時からそもそも日本酒とは何なのかを知りたいと思うようになりました。これは年齢を重ねるとともに、人生の中味について知りたいことが増えるのと同様関係あるのかもしれませんが。

まあともかく大した酒呑みでもないのに、それなりに日本酒とは付き合ってきました。しかし適量を超えて飲む安酒が段々体に受け付けなくなるような時期がありました。それでも体が回復すると又も飲み続けることになるのですから、矢張り日本酒は自分にとって人生の伴侶以上かもしれません。

ここで書くことを中断していましたが、日数が立ってみると、又してもお酒について書きたいことが浮上してきました。勤め先の関係で忘年会に出席すると、二次会として必ずや福岡中洲

の繁華街へ繰り出すことになります。幸いなことに中洲について隅々までよく知っている友人がいました。親しいもの数名集いながら、彼の案内でいわゆるスナック店を訪れることが頻繁に生じることになりました。ところがスナックでは日本酒が用意されているところは殆どなく、大概ウイスキーの水割りが主なのです。もちろんブランデーでもかまいません。或いはビール系統かもしれませんが。しかし日本酒の銘柄が準備されている所はまれです。どうしてそうなのか現在でも詳細は掴みかねますが、スナックで日本酒を飲んだ記憶がないのです。況んや爛をつけた日本酒など無理な相談です。ウイスキーの水割りというのも変なアルコールの味わい方でしょう。本来ならストレートか **on the rock** で飲むのが、味わいの点ではいいのですが、それではこちらの体が持ちません。よく洋画の主人公が、カウンターから出されたウイスキーをストレートで一気に喉元へ流し込むシーンを見ますが、我々日本人の真似することのできない芸当です。いずれにせよ、その時から段々とスナック通いを一人ですることになりました。多分自分の好みの場所が決まってくることと関係あるでしょうが、複数の人間と出かけるとそれぞれの思惑と興味や関心が異なり、なかなか自分の思い通りには行動できないからです。そんなことからインターネットで見つけたスナックを常時訪ねることになりました。その頃からスナックにも漸く焼酎が登場するようになっていましたが、ビールやウイスキーと比べると当然値段が違いますし、懐具合を考えれば安い方に傾斜するのは致し方ありません。しかしこちらは専らウイスキーの水割るかビールに限定していました。焼酎を味わう感覚がなかったからだといっておきます。学生時代に飲んだことのある焼酎よりも品質がよくなり、味が淡泊な気がしたのです。それにウイスキーの水割りの酔い心地は、なぜか自分の体にマッチするように思われました。しかし自宅では主に日本酒を飲んでいましたから、不思議と言えば不思議ですが、爛をつけた日本酒は又格別の味わいを残してくれるの

です。けれど純米酒との出会いは、随分後のことになります。既述したように、それまで日本酒の知識は何一つありませんでした。

話の道筋をちょっとだけ変えますが、日本酒を本格的に飲み始めたのは、幸いに職を得て現在の伴侶と付き合いだした頃です。よく二人で、福岡天神近辺にある屋台の出来たての天ぷらを食しながら、熱燗の日本酒をコップで飲んでいました。それも季節が冬にむかう晩秋の頃、日の暮れた道路に照らし出される屋台の電球に誘われるように暖簾をくぐります。馴染みになった屋台の女将さんの優しいもてなしに心もほかほかと温まり、お酒の味と言うよりも、全体的な雰囲気醸し出す酔い心地にすっかり嵌まってしまいました。幸い彼女は父親譲りの酒豪とまではいかなくとも、そこそこ飲める口でしたから、一人で飲む酒より、二人で楽しめるお酒ほど気持ちを高揚させてくれるものはなかったのです。若いということは今の時間が全てと言っていいでしょう。過去も未来もない現在だけが、哲学的に考えなくとも、生きている証でもあるのです。などと年を重ねた後に言うのも気が引けますが、やはりあの時間はかけがえのないものだったと思われます。何故なら後々屋台を訪ねることがあっても、あの頃の雰囲気を味わうことはありませんでした。

ところで日本酒を個人としてどんな風に飲んできたのか、その歴史を辿ることに話を移そうと思いましたが、私はお酒の専門家でもないので、適当な知識を折々に出しながら話を続けたいと思います。何故なら先にも述べたように長い間、その本当の核心的事柄については何の知識もなく日本酒を飲み続けていたからです。たとえば戦後すぐの頃、これは私が生まれてすぐの頃と言ってもいいでしょうが、皆が飲んでいたのは怪しいアルコール類だったでしょう。況んや日本酒などが出回るのは、世相がある程度落ち着いて、それなりの時間をかけたものができるようになってからだと思われます。しかしアルコールの需要はいつの世にもあるはずで、戦後の混乱期など、それは最も

大きかったのではないかと推察されます。カストリを飲みすぎて命を落としたなどということを本で読んだことがあります。カストリとは何なのか私にも分かりませんが、奇っ怪なアルコール類だったことは確かでしょう。

私が純米酒という言葉を知ったのはかなり最近のことで、それまで化学アルコールで水増しされた清酒を、一級酒とか二級酒とかいう分類で知っているだけでした。或いはこの酒は甘口とか辛口とか言われるのを耳にしたこともありました。しかし日本酒を米と麴だけで造るのは特別で、それが純米酒と言われることも知りませんでした。「美味しんぼ」の漫画シリーズで純米酒の銘柄を知り、それを契機に石川県菊姫酒造の「先一杯」を飲み始めたとき、それまで飲んでいた日本酒と全く味が違うのに気づかされました。貧しい田舎出身の私は、幼いときから何かを本当に味わうということを知らずに育ってきたので、舌先が鈍く、おいしいものを食べたいという欲望が余り湧くこともありません。従って日本酒の場合も同じ事が云えるのですが、どういう訳か純米酒の新しい味わいだけは舌先と無関係に脳裏に焼き付いたのです。そこで「純米酒」について書いた簡単な新書版か文庫本を手に入れ通読してみると、なるほどと納得いく事柄が述べられていました。一番注目したことは、化学アルコールを加えることによって、米と麴でできる日本酒本来のアルコールが随分変化するということでした。香りや味わいが、劇的といえるくらい別のものになるのです。しかもアルコールの分量を増やすという本来協道的な操作を行なうのは、どうやら経済的な利潤の問題と関係しているらしいことでした。これは日本酒にかなり高率の酒税がかけられるという国の管理からくる必然的な道程でもあるらしいのです。かなりの長期間に渡って、酒は厳しい製造管理の下に置かれていたようです。かように日本酒の製造過程から、当然ながらその流通形態へと話は移ります。何故ならいくら立派な純米酒を酒蔵で製造しても、その全国的規模の流通状況を確立することは容易ではありませ

ん。消費者の手元に日本酒が届くための仕組みは、小さな酒造会社の知恵と才覚だけでは不可能です。我々が例えばスーパーマーケットに出かけて日本酒を捜そうとすると、限られた著名な全国流通の日本酒だけが目に入ります。しかもそれらの日本酒は、棚晒しと言っていい状態の陳列で、どれくらいの期間そこに置かれたままになっているのか調べようとする、目の玉が飛び出るほどの驚愕に捕らわれます。製造年月日から半年以上経過しているものが、埃をかぶって並べられていることもまれではありません。日本酒は温度の変化に敏感に反応しますから、時間の経過とともに味わいが劣化することは間違いありません。本来ならば冷蔵庫で温度管理を厳密にしなければならないはずですが、冷蔵庫に収納されて販売される酒は、かなり値の張るいわゆる高級酒に限られます。よく言われるところの純米大吟醸酒でさえ冷蔵庫とは関係なく、見世物のように棚に陳列されているのですから驚きの種は尽きません。日本酒の販売が自由化されて以後、販売者の日本酒に対する無知からか、単なるお酒の値段だけが問題であるかのように扱われているのです。一時は日本酒よりもビールや酎ハイが好まれ、隅に追いやられた結果、当然のごとく日本酒の地位が低下したのかもしれない。「先一杯」を飲むために、私は酒造元へ電子メールを出して、福岡県の現住所近辺で購入できるにはどこへ行けばいいのかと尋ねてみました。その結果、販売店を3軒ほど紹介してもらいましたが、いずれも車でかなり時間を要するところでした。これは酒造元の流通経路が、大手の酒蔵などと違い非常に限られているからで、販売者と酒蔵で予め話し合いができていなければなりません。しかも良心的な酒蔵ほど販売店に対して注文をつけますから、事はかなりの困難さを伴います。つまり商品の劣化を避けるための設備が整っているかどうかを問題にすれば、販売店が大量の日本酒を仕入れて、買い手不明のまま保管し続ける事は簡単にはできかねるのです。一応販売店と話し合った結果、毎月一升瓶5本を手に入れる段取りができま

した。ところがある時、健康を損ねて半年も禁酒することになり、いつも購入する販売店に迷惑をかけることになってしまいました。店から電話があつて、いつものお酒は買わないのかと聞かれたのです。そこでこちらの事情を話して一段落しましたが、それ以来、遠方まで時間をかけて買いに行く気が急速になくなってしまいました。そこで酒の銘柄を変えてみてはどうだろうと考え、新しい酒を色々と試しに飲んでみましたが、上述したように、品質管理に気を遣い、そこそこの値段の純米酒を近辺の店で購入することは容易ではありませんでした。ところが最近になって日本酒に対する一般の見方が変わったのか、それともいい品質の純米酒が出回るようになったためか、近所にも何軒か日本酒の販売店が開店することになったのです。またまた話変わりますが、空になった一升瓶は五円で引き取ってもらえます。しかし四合ビンには日本酒に限らず、売っているお店で引き取らないところばかりです。これは販売店の振る舞いとしては腑に落ちません。売った後は、各市町村の取り決めに従い空きびんを始末して下さいと、消費者に対して一方的に言うのは、アルコール類の販売店としては失格以外の何ものでもありません。他者に後始末を任せているのですから。そうした店ばかりですが、近辺に一軒だけあらゆる空きびんを引き取る販売店が存在します。リサイクルというきれいな言葉も、日常的なアルコール類のビンに関しては、責任を持って引き受ける店が殆どないというのが悲しい現実です。それ程までにコストの面で採算がとれないのかと訝しく思われます。そのくせ過剰な包装紙には余分のお金をかけているのですから、一体どういう了見なのでしょう？一升瓶を六本収納できるダンボール箱を利用するほど、普通の人はお酒を飲まないのでしょうか？ダンボールを使用すれば、余計な紙袋も包装も必要ありません。しかし一本だけ購入となれば、ダンボール箱の需要はなくなるかもしれません。車を使い日本酒を購入しようとする、意外と車内では一升瓶の置き場所がないので、ダンボール箱を後部

座席の足下に置くのは賢明です。びんが割れる心配もありませんし、重たいビンを手元でしっかり支えておく必要もあります。しかし消費者のお客側からすると、たった一本とか四合ビンの銘柄を二本とか購入するのは、なんとも気が引けます。普通の酒飲みであれば飲む量としては不足で、またすぐにも酒を買いに行かねばなりません。私は既述したように、一升瓶を四・五本買うのが普通でしたが、そうするとワインと同じように、収納できる特別の冷蔵庫とその場所を準備しなければなりません。その為の費用を節約して、お日様の差さない薄暗い場所にダンボールのお酒を仕舞っていました。温度が上がらないことを願って。しかしこれは品質管理の面で問題があります。販売店の棚晒しの陳列ほどではありませんが、日本酒の劣化に耐えることは不可能でしょう。確かに五本目あたりになるとちょっぴり味が変わっているのが分かります。従って二本ほど購入して、割合短期間で飲み干すのが最良の方法です。管理は酒の販売店に任せるわけです。当然ながら購入するお酒も、冷蔵庫で管理され日付が現在に近いものを選択することになります。最近の販売店は日本酒の一部を冷蔵庫で管理し、他は焼酎類と同じように陳列棚に並べています。しかしながら、限られた銘柄の純米酒から自分に合うと思われるものを探し出すのは容易ではありません。失敗例は何度もあります。実際に飲んでみなければ、自分に合った最良の酒を探し出すことはできません。結論的に言えば、酒蔵とその県名や、「美味しんぼ」で紹介されていた有名な銘柄の酒など、これまでなんとなく知っている情報を頼りにトライしてみるしかありません。それでおいしい酒に巡り会えたと言えるでしょうか？値段もその決め手に影響します。高い酒を買う気はありませんが、標準的と言える値段がどの程度なのかも分かりません。あえて述べれば、冷蔵庫で保存されている純米酒の一升瓶で、2500 円から 3000 円程度を目安にしています。それを一度に一本ずつ二本を購入し、気に入れば次から一度に二本手に入れます。持ち帰ったお酒は一本だ

け家庭の冷蔵庫にしまい、後はダンボール箱に入れたままになります。ほぼ一本を四・五日で飲むので、空になればダンボールのビンが冷蔵庫に移ります。これが現在の酒との付き合いの基本ですが、時には新しいお酒に移行したくなるので、又しても一本ずつ二種類のお酒か、これまで気に入って現在飲んでい
る純米酒を一本と、新しい銘柄の一本を買うことになります。ところで日本酒は熱燗と冷やと両方で味わうことができますし、そうでなければ酒らしくありません。季節によっては燗をつけた方がいいし、暑い盛りに冷蔵庫で冷やした日本酒は、冷たいビールと同様気持ちを和ませてくれるでしょう。燗も良し、冷やも良しと違った味わいのできる純米酒は、結構探し出すのに苦労します。ともかく実際の体験から自分の感覚を頼りにするしかありませんが、時には私の連れ合いもその味わいに対して評言をくれます。一人の判断よりも当たっているかどうかは分かりませんが、それなりの確信を抱ける点では、何人かの人に試してもらうのが良いでしょう。私は大抵夕食の時に熱燗を二合ほど飲み、就寝前に寝酒として少量の冷や酒を嗜んでいます。場合によっては YEBISU の缶ビールも付け加わり、その他、梅とウイスキーと角砂糖でつけて半年ほど寝かせたアルコールを氷で割って飲むこともあります。焼酎がお供になることもあります。これもお湯で割るか氷と水で割るかは、その時の気分次第と言えます。ブランデーやワインを飲むことは殆どありません。

かくして如何にもいっぱしの酒飲みみたいな口上を述べましたが、冗談半分で言えば、現在の私はアルコール依存症に近いと言えます。何故なら体内にアルコール類が摂取されないと、なかなか寝付かれないことがあります。習慣のように酒などを飲み続けていると、当然体調を悪くしますし、様々な臓器にも悪い影響を及ぼしているはず。しかし健康に留意して酒を控えることは気持ちの上からも馴染めないことです。ドイツ文学者の大山定一氏は肝臓を悪くするほどお酒を飲んでいたので

すが、それでも、通い慣れた飲み屋で最後まで飲み続けたのには感心しました。高尚な雲の上の巨人たちの棲む世界に遊ぶ氏が、酒以外の何処にその安らかな場所を求めることができたでしょうか？また同じ独文学者の高橋義孝教授も、病床でガラス製の吸い飲みを使用しながらウイスキーを嗜んでいたようで、その記事を何処で読んだか記憶にありませんが、感銘させられました。高橋プロフェッサーはダンディな紳士で、その聲咳に接して講義を受けたのですが、確かお酒については、昔風の小料理屋について書かれた随筆がありました。気心の知れた女将が気を利かせて酒肴も用意してくれるのは、酒飲みにとって極上の舞台に違いありません。残念ながら居酒屋程度で済ませる当方にとって、教授のような高尚な酒飲みにはとうてい達しません。でも、それでも達人の雰囲気を知ることは気持ちのいいものです。

定年で仕事を辞めてからは、専ら近所のスナック通いに時間をつぎ込み酒を飲んできました。散歩中に偶然見つけたピンク色の看板に引き込まれ、店内に入ってみると若いフィリッピン女性たちが溢れていました。ここで飲むのは大抵ビールかウイスキーの水割りでしたが、最近焼酎のお湯割りや水割りも飲んでいきます。多くの者にとってスナックは飲むだけでなく、カラオケで歌うことの方が目当てなのかもしれません。こちらとしては歌が下手なので、当然アルコール摂取が主になります。フィリッピナーはお互いで話す時、タガログ語を使用することがあります。フィリッピンの国では英語とタガログが公用語ですが、タグリッシュという二つのチャンポン言語を馬鹿にしたような表現もあります。地方出身の女性たちはタガログ語が母語でしょうが、英語も教育の場では使用されるため、結構英語に堪能な者もいるようです。彼女たちは来日する時、全く日本語はできないのに、短期間で話したり聞いたりできるようになります。耳から聞く日本語をそのまま覚えているのですが、文字を通さぬ言語の習得は、日本人の方法とは全く反対の方法です。です

から日本語を書いたり読んだりは殆ど不可能と言っていいでしょうし、その勉強の機会もあり得ません。少し脇道にそれすぎました。退職後のヒマを利用してタガログ語の学習に嵌まりかけましたが、それについては別の機会に譲ることにします。